

二軍戦

二〇〇八年六月初旬のある日、北海道日本ハムファイターズ二軍の本拠地鎌ヶ谷球場を訪れた。「プレスルーム」にあらわれた長身の選手の名はダース・ローマシユ匡。彫りの深い顔立ちと、すらりとした手足はプロ野球選手というよりはちよつとモデルを連想させる。空いている席を見つけると、目の前の試合を食い入るように見つめ出した。「やばースライダー、めっちゃ曲がつてるやん」、発せられることは、いまどきの若者そのものだ。二軍の試合では、調整目的で一軍クラス投手がマウンドにあがることも多く、若手選手たちにとってはプロの技術を勉強できる格好の場となっている。こととは裏腹に、真剣なまなざしがマウンド上の先輩投手に注がれていた。

野球ファンにはダースとよばれ親しまれている彼は、岡山県の野球強豪校・関西高校から二〇〇七年にドラフト四巡目で北海道日本ハムに入団して二年目の投手である。高校野球甲子園での敗北に、倒れ込まんばかりに泣いて悔しかった姿は多くの人の記憶に残る。一九〇センチメートルの長身とその出自から「ダルビツシユ二世」といわれることも多い。マー君こと田中将大投手（東北楽天）や斉藤佑樹投手（早稲田大学）は、甲子園を沸かせた同期にあたる。

「プロ野球選手になる」

一九八八年、奈良県生駒市でインド人の父・シエンカーさんと日本人の母・記久子さんとのあいだに生まれた。小さいころからスポーツセンスは抜群だったが、野球は大嫌いだ。父親がテレビの野球中継ばかり見るので、大好きなアニメを見るのができなかったからだ。そんな彼が野球をはじめたのは小学二年の冬。小学校でいちばんの親友から地元の少年野球チームに誘われたのがきっかけだった。野球のルールも知らず、興味もなかった彼にとって、親友と遊べなくなるのがいちばん嫌だったという。

野球チームに入団したが、好きではじめたわけではなく、一向に上達しない。練習にいつてもつまらない。コーチからは「いつでも辞めていいぞ」と言われる始末。そんな彼を励ましたのが、母親の「うまくなればいいやん。ずっとやつてれば楽しいことだつてある」ということばだった。負けず嫌いで目立ちたがり屋の性格に火がついた。それからは絵に描いたような野球人生を歩みはじめる。小学六年のときに「ちびっこ甲子園」に出場、中学でもシニアチームのエースとして全国大会出場をはずす。このときには五試合を投げて計六〇奪三振の大会記録を作り、一気に注目される存在になっていく。当然のように甲子園常連校から声がかかり、

子どものときから明るい性格で、いつもたくさんのお友達に囲まれてきた。そのため、出自や容姿などが理

由で特別な思いをしたということはない。それでも、カタカナの名前からかわれたり、「顔濃いな」と言われたことは何度かあった。そのたびに「なん

で僕だけこうなんやろ」と思ったりもした。しかし、中学生になり全国大会で訪れた北海道での経験が彼を変える。地元チームの子どもたちから「ダースや」と声を

高校時代には、春夏あわせて四回の甲子園出場をはずすことになる。

ダース投手には、ずっと「絶対にプロ野球選手になる」という信念があった。自分がベンチ入りできなかった高校一年の夏の地方大会、スタンドで応援しながらも、気持ちは複雑だった。自分がマウンドにいけないチームが勝つても意味がないと思つたからだ。父親のシエンカーさんは「運と縁」のある人がプロ野球選手になれるという。しかし、高校時代、友だちと夜の一〇時まで遊んだあと、こっそり下宿を抜け出し、明け方近くまで縄跳びやランニングをしたという彼自身が、「運と縁」をたくりよせようとしていたことは確かである。

インドの母国

父親のシエンカーさんはヒンドゥー教徒のため、今でも風呂上りのお祈りを欠かさない。ダース投手も小学二年のころまでは、父親の真似をして一緒にお祈りをしてきた。しかし、子どものころ、父親から何かを強いられたという記憶はない。お祈りをしなくなったときも何もいわれなかったし、ヒンディー語を覚えなさいと強要されたということもない。こういった環境で育つたせいであろうか、自分のなかに流れるインドの血をとりたてて意識するようなことはなかったと

外国人として生きる

インドとのつながりを胸に

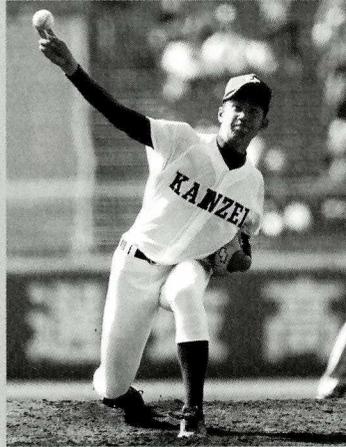
窪田 暁（くぼた さとる）

総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程

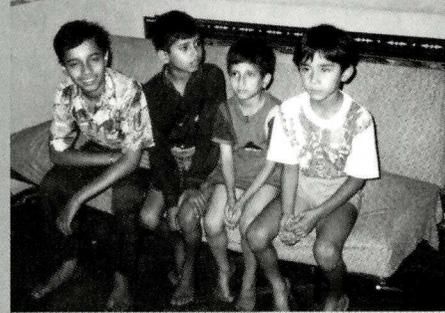


高校三年・夏の甲子園を終えて
地元の友人たちと

高校三年・春の甲子園で
力投するダース投手



小学三年のときに訪れた、
インド・バンガロールの父親の
実家で。従兄弟たちと（右端）

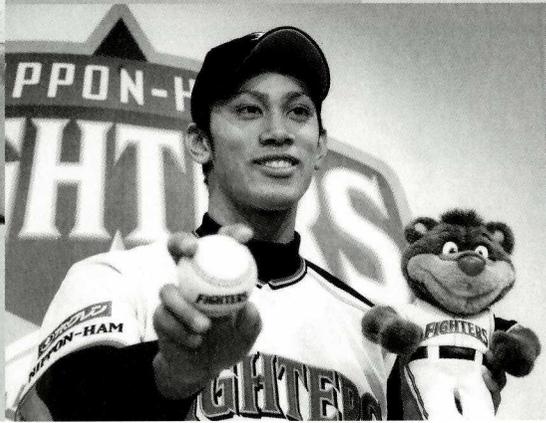


北海道日本ハムファイターズの
入団発表

祝 北海道日本ハムファイターズ入団
ダース君を励ます会



プロ入りが決まり、少年野球時代の関係者が
開いてくれた激励会で。家族とともに



かけられたときに、そんな思いも吹き飛んだという。「自分で得や！名前すぐに覚えてもらえるし、チャンスやん」。

これがきっかけとなったのか、最近自分はみんなにないものをもっている、自身のルーツを積極的に受け入れられるようになってきた。昨年の一二月のことである。プロ一年目のシーズンを終えて迎えた初めてのシーズンオフ、久しぶりに実家に帰るといつものように祈りを捧げる父親の姿があった。そのときふと思つた。「俺もやつたほうがいいのかな」。こうしてプロ野球選手になれたのも、日本人にはない体つきに生まれた結果だと今なら思えるからだ。

順風満帆に見えるダース投手の野球人生も、プロの壁にぶつかっている。これまでは、速い球さえ投げていれば打たれることはなかった。ところがプロ相手では、一五〇キロ近い速球でも簡単に打ちかえされてしまう。現在はコーチの指導をうけながら、プロでも通用するようなキレのあるボールを手に入れようともがいている。インドの血をひく投手が、日本のプロ野球で初勝利を記録する日はそう遠くはなさそうである。

今年の六月六日、母親の記久子さん五十一才の誕生日、彼女の携帯に一通のメールが届いた。「俺は野球頑張つて、今よりはるかにでかい家住ましたるから待つていつ」。